

みんなみの阿蘇みえねども避難所の冷えゆく闇を思ふ吾らは
本田一弘

熊本地震の被災者の「今」を、東日本大震災の体験者として思いやる一首。「朝日歌壇」の投稿歌などで当事者の作は多くあり、臨場感のある佳作も少なくなかったが、当事者以外の作では佳作はほとんどなかった。そんな中で視点をしっかりと定めたこの作に注目した。

また、現代短歌では使いにくい「吾ら」という語をあえて使った点も見逃せない。

一人一人の生の来し方見て読めば未知なる死者も知己の如しも
荻原桂子

熊本地震は作者の住む宮崎でもかなりの揺れだったらしい。今月の一連にそういう作がある。この作、そうした文脈のなかで、熊本地震の死者をうたっている。一首の背景としての文脈づくりに成功。

水平を志す水、引き入れる水に習ひて土を均せり
松本秀一

田の水入れである。自分が主人公になって水や土を使うのではなく、あくまでも自然の一部としての働いている感覚。「習ひて」が深い。

鉢いっばい顔せり出せるパンジーと入学式の子を写したり
服部心子

小学校入学の子をうたった作。びっしりと寄り合って花を咲かせる鉢のパンジーと小学一年生の対比が楽しい。童心がベースにあるからだろう。

短歌の現在

No.424 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

うつし世の数かぎりなき死者ねむる年表を閉つ花咲き初めて
北澤道子

初句と結句がみごとに照応して、死者の存在感の確かさを的確に表現している。まさにこの世の今を眠っている死者、そんなイメージである。

横たわるベッドに夏空みあげてはもう鳥になりかけている母
川又和志

ベッドから見上げる夏空。たぶん幻視なのだろう。天井や壁の向こうの青空がくつきりと見えているのだ。介護する母を、ファンタジックなイメージで抱きとつていような一首。

将来を語ることなく過ぎ来しのはなしに終はる二時間ほどを
間宮清夫

さり気ない一首ながら、幾度かくり返し読むと、人生の半ばを過ぎた者が思う「将来」という語への思いがたわつてきて、しんと心に沁みる。一連の文脈では、たまたま居酒屋で隣同士になった初対面の年配男二人の会話らしい。

粟生の橋渡る用事はもう無くて舅も母もないこの春
小林まや

母上の他界されたあとの感慨をうたっているようだ。日常生活の場にある橋の名前「粟生の橋」を一首にうたいこんで、たんだんとうたいつつ、人生の寂しさを浮かび上がらせている。

人切りて戻り来たれる剪刀の二つの刃を洗い浄める